

# 遍路と其の子

大阪府立市民館長 志賀志那人

淀川支流が、大阪市の東北の角に、ボンと突き當つて、北に曲る、其處には、舊水道の貯水池が、外壁だけ残して、ボンベイの遺跡とでも云ふ風に淋しく閑がつてゐる。其の西の方に橋がある。都島橋と之へば、車かに聞えるが、其の下には、ゴロをつぎ合した、天幕みたいなもので、出来た四十餘りの小屋がある。電車の橋の上を通る人は勿論、橋の隅にでも控たれて見なければ、其處に透られた、此の部落には、誰とて気付くものはない。

例年よりも、激しい雨続きの、大正十二年梅雨も終りがけの、珍らしい、午後の雨を、久し振りに、おがんだ成日、成友と天神橋六丁目の、栗木の駄菓子屋で、おかみ様の、汚れ手で、杯つて呉れた、菓子のお包を有つて、此の部落を歩ねた。

此處の人々の生活に就いては、度々紹介されてゐる。然し、往つて、話して見なければ、其の本當の生活に觸れる事は出来ない。そして、探訪記者としてでなく、役人としてでなく、慈善事業家としてでなく、教育家としてでなく、謙遜な人の子として、訪ねなければ、あの人達の優さしい、人生觀に觸れる事は出来ない。

乞食生活の調査に「乞食排水」がある。然し私は、乞食でなくて、人の子として有つてゐるあの人達の人生觀に、ほろりとさせられた。

「逆巻様がきやはつて、立返け、いやはりました。何時までも、戻りがない、まつ調に行かん、四五日中に、支度させ、え、こないいやはりました。

「ほんまに、旦那はん、いつ何時でも、引き揃はんなりめんね、あて違、處構はず、お上の土地だらうが、他人様の土地だらうが、行き當り、ばつたり、こないして、暮さして、貰ひますよつてになあ。

「此處を退いたら、どこに行く、そねいな事決めてまへんね、ほん間に、往きあたり、ばつたりだつせ。

「子供、大分願ますつしやるなあ、此處の沙子中で、五十人位おまつかなあ、働き云うて、しめんけど、内の子は、こない柄は、小そやおまつけど、十国だす、毎日七時間から、辻占賣りましてまんね。

「あてはなあ、難利の氣は、おまへんけど、徳徳弱うおますよつてに、戻路してゐまんね。

「子供を學校でいえあつそらな。

私は、菓子を買ひに集つた、數十人の子供達の中から、字を習ひ度いと、云う子供を六人許り、發見した。そして學校をする場所を、連れて行かうと、調べ、痛しそらに、松栢木の水桶を盛きわしりながら、小屋の裡に、驅込

んで、まつぱりした、單衣や、浴衣を着て、四人は、楕ひ物の下駄を穿いて、二人は、襦足で、先き程の風路が、皆の保護者格で、私達の後に、ついて来た。

友の考へは、此の子供達を、何處かで、教育し、それを、次手に其の親見救を、感化して、正業につかせ、推し廣めて、此處の人情の生活を、改善させる事が出来やうと、云ふ様にも思はれた。喜んで、雨水の溜つた、泥道を、キヤツキヤツ駆け来て来る子供達を連れて、此の附近での民衆を賑はしたる、市民會に運入つた。

妙な此の一行の、道行きを見た近所の人達は、殊日の見せ物でも見る様に、冷めたい、珍らしさを、表はして居た。それだけでなく、市民會の下足預りの人達さへ、變な顔をしてゐた。そして其の泥下駄を留るのを、不思議がる程であつた。七人の人達は、私共の後について、館内を見物した。そして最後にルーフガーデンに上つた。

「楕ひ物」

「おこやは、うちは。」

「そやや」

屋根の上から、都島橋は、手にとる程に見える。多くの観察者も、此處に案内されては、都島橋と、其の下の人達の顔を眺められるのだ、其の人達は上から、此の子供達は下から、仰いで眺めてゐる、其の橋を、今日始めて、高い塔の

上から、そして其の下の、自分の家を、透かして見る譯だ。いや其の内の、親や兄弟の、まどむを、憎まれる様に見てゐるんだ。市の南の方、に立ち竝んでゐる、澤山の、高いビルディングなどには、見向きもせず、下りて、とある一室に這入つた。

そこで友達は學校の相談を始めた。先づ第一に時間の問題で、ごてだした。辻直實は、晝がよいと云ひ、御鉢洗しは、夜がよいと云ふ。六人の子供は、動かす事の出来ぬ、時間を有つてゐる。そこで二相に分けねばならぬ事になる。それは忍ぶるとして、も一つの困難がある。

「あんたも、何時まで、編路するつもり？ どこぞ、家を換してやるから、そこで何なりと働いて、子供を（此の編路には二人の立派な子供がある）立派に成人さしたらどうや？」

「ほんまに、忍べなうおます、すりやそう出来りや、ほんまに仕合せですが、あて達は、今日あつて明日は、どねえ、なるやら、分らん身だすよつてに、何云うて、まめて貰う譯にや、いきめんがなあ。

「君もさう、やめ給へ。あれ程、人生の有爲轉變を、謙遜に受け容れ、運命の前に、従順に従つて行く人々に我々の考へた、生活や教育は、或は無用かも知れないよ。あの人は、物乞はするが、野心は有つてゐない。樂みは求めるかも知れないが、希望は有たない。自分で描いた、未來の機關を、其の運命に逆らつて惹き、惹き惹てやうとはしないんだ。

「氣力が無いと謂はゞ謂へ、努力が無いと起れば、退けよ、口には表さないが、運命に従ふ、強い力は成は、所謂努力と云ふものを、超越してゐるかも知れない。あれより下の生活はもう在りはしない。そこに安住し、侮辱も、痛めも、痛感も、夜を苦しめる事は出来ない。そして、現境もなければ、不平もない。後等には、夜が明けて暮るれ事。腹が減つて、食へる事。其の外には、雨も風も、何も無い。

「その子供は、親からたゞ體を買つただけだ、勿論親子の愛はある。然しそれはたゞ愛と云ふ心の關係だけだ、愛するが故に、どうすると云ふ事はない。たゞ淡い快しみを有ち合つて、食ふ爲めに、一所に動く。丈で、其の外事は全然無関係である。子供は親に何も求めない。乞ふ事さへ出来る程になれば、親に求める必要もない。親も子に求めない。親も亦子供と同じ事である。もし求めるとすれば、自分の必要の爲めに、物乞させると云ふ體面を要求があるだけである。然しそれとて絶對のものでない。一旦外に出れば、もう又合へるか分らない。子と親と離れて居る時に、追放されたら、又此の世で逢う機會は、無いかも知れない。夜の海くちがりで、小屋の内に、親と子と、妻と夫と無事に出合つた時の、後等の喜ば、どんなだらう。運命が許した、拍子の一瞬こそは、無常の裡に、不基の窟をかける、幾々の、夜のまどむより、どんなに喜ばしいだらう。

中つと以前に、高等の教育を受けた、一人の青年が、不圖した事から、乞食の群に投じて、四年の月日を、追はれ々々で、益る間に、其の群の中から、娘を買つて、今では乞食の人々の救済の爲めに、同輩と云ふものを造つて、随分の人に知られてゐる。其の人の話した事を思出した。そして其の人に似た様な事を考へて、私と一所に、竹の下を訪ね

其處の子供の教育をし様と云ふ、此の人の計畫に對して、むしろ冷かな感をさへ有つ様になつた。然し、彼は飽きやめをかつた。此の私の感を鑑み、どうかまして、此の六人の子供を教育し様と強い決心を有つて、色々、方法を講じた。慈善事業家には、諷刺は禁物かも知れない。

夏は、六足の新しい、下駄を、買つて子供等に、遣つた。廻路は旦那様おありがたり、と云つて座を立つた。子供等は、不思議そうな顔をして、何の挨拶もなしに、灯ともし頃の端末の荷を、追はれる様に、橋の袂に歸つて往つた。

## 一人前に 歡びの記念會

### 支那兒童等のために東洋婦人會の計畫

一昨年の夏支那の眞實の地から生活に困る男女の兒童達を二十六人東洋婦人會の事務理事栗塚龍子女史が彼地から伴れ戻つて以來市内の諸工場に委託し各々手に技術を仕込んで来たが隔二年を迎へた今年は何れも立派な一人前の職工の腕が出来、日本語も自由自在となつたので毎年の通り十六日は輸入として栗塚女史の宅に集まるを兼ね同時に東洋婦人會では相談會を開いて栗塚龍子小森孝子奥平男夫人清藤夫人等が主催つて、八月三日が支那兒童等の二年前着京した日であるので其の日を記念する會を催す打合せする筈であるが當日は支那兒童を引取つて世話してゐる各工場主や商店主を招き職を覺えて月給を貰ひ小使錢に不自由しない今の状態から機嫌時代を過ぶといふことであるが當日支那兒童達も東洋婦人會の婦人達や招待主連に何がなお禮の心を表さうといちらしくもおさく準備をしてゐる